〈2011年度　第２回定例研究会〉

地域づくりとレクリエーション

講　演：佐藤　靖典氏（ＮＰＯ法人福岡県レクリエーション協会事務理事）
実践報告Ⅰ：伊東　雄二氏（やまが総合スポーツクラブ会長）
実践報告Ⅱ：上野　祥子氏（UEKIレクリエーション協会理事長）

日　時：2011年11月12日（土）

地域におけるレクリエーション事業とともにレクリエーション組織づくりをすすめてこられた三人の方に、講演いただきました。佐藤靖典先生はＮＰＯ法人福岡県レクリエーション協会専務理事・学習センター長として、市町村のレクリエーション協会をさまざまに支援しておられます。伊東雄二先生は、山鹿市においてレクリエーション協会づくりをされ、現在は、やまが総合スポーツクラブの会長を引き受けられています。上野祥子先生は、熊本市植木町において、UEKI・レクリエーション協会を立ち上げられ、熊本県体育指導委員協議会・女性委員長もされています。

佐藤先生は「あなたがつくる”温かい”まち～地域づくりとレクリエーション力」と題して50分の講演を、伊東先生は「やまが総合スポーツクラブの７年から」、上野先生は「UEKI・レクリエーション協会の10年から」と題して、25分の実践報告をそれぞれして頂きました。３人の先生方の講演の要旨をお伝えします。

佐藤先生は「ラの音で挨拶しましょう。たったこれだけで人生が変わります。なぜなのか。自分が意識しないとできない。それは何のためか。周りにいる人を少しでも笑顔にしたい、元気にしたい、楽しい人生を送ってもらいたいという願いがなかったらできません。レクリエーションを学ぶっていうことは、そういうことだと私は思ってます。」と話しをはじめられ、「楽しもうとなると遊び心が出てきます。そうすると、いろんなアイディアが出てくる。行動が出てくる。そして、自分で出来ないことは、出来る人と仲間を作ってなんとかやり遂げないかんという風に思ったりします。」と話され、「FUKUOKAレクリエーション宣言」の内容を紹介されながら、「レクリエーション組織とは、これをレクリエーション力と考えてみてください。気がついたことをこういうのがレクリエーションだとピックアップしておいてください。そうすると、レクリエーション力の実態が見え始めます。レクリエーション組織とは『レクリエーション力』をカタチにし、社会にアピールしていく人の集まりです。」とお話くださいました。

伊東先生は平成４年４月に山鹿市の中央公民館にレクリエーション講座ができたことまで溯られながら山鹿レクリエーション協会設立の狙いや10年の取り組み、やまが総合スポーツクラブの趣旨に賛同して参加していかれた様子を話されました。平成17年１月に近隣の町（鹿本・鹿央・鹿北・菊鹿）と一緒になって、新しい山鹿市が誕生したことにもふれられながら、「今改めて、地域づくりとレクリエーションという観点から振り返って、「相互交流の喜びを通じて地域づくりに機能できた」と話されました。それは一つは地域住民の視点に立つ、二つ目は目的やライフスタイルやラ

イフステージに応じた取り組み（プログラム）を作る、三つ目は地域社会に対するアピール、四つ目にはマネジメントの視点を大事にすることだとされ、成果として、地域住民のクラブ参加者・イベント参加者の増加、子どもから年寄りまでの活動・交流の促進、スタッフのスポーツクラブに対する理解・認識の向上、学校部活動への支援を通じて総合型への理解が進んできたと挙げられ、今後の課題で、ＮＰＯ法人化に向けての取り組み、指導協力者を育てる、地域のニーズに合ったプログラムの開発を上げられ、「子どもたちが大人になったときに、またクラブを引き継いで、続けてやっていくというのが本当の地域づくりに結びついたクラブではないか」と強調されました。

上野先生は、『むすん“で”』、『ひらい“て”』って、“て”とか“で”という言葉が出てきたときには、テーブルをちょっと叩いてみてください、という誘いかけから話しはじめられました。レクリエーションとの関りは、娘の授業参観だったこと。指導者養成講座に行ったのがちょうど20年前、それから、ＰＴＡの役員などが回ってきても前に進む道を私は選びましたと話されました。そして、“ひろげる”とか“つたえる”をキーワードにレクリエーションを学習するうちに、レクリエーション協会をつくろうといろんな方にお願いをして、５年後にはもうちょっと大きくしようねっていうことを言いながら立ち上げたこと。今求められていることをまずやろうと2002年６月福祉レクリエーションの集いからレクリエーションインストラクター養成講座をはじめたことは、レクリエーション協会の飛躍をする第一歩になったと話されました。小学校へのアプローチ、地域のいきいきサロンへの協力、障害者のニュースポーツということで太極柔力球、体育指導員をされていることから体育指導委員協議会の中にもたくさんレクリエーションを入れていったことを話されながら、「地域のコーディネーターが参加者と適当な距離に近づけるようになることが、コミュニケーションを成立させる一つの目安と考えられる」、そのためには「大きくても小さくても満足をしていただくことの必要性もわかってきました」と。そして、今年３月の通学キャンプの映像で、「子どもたちを中心に置いた地域づくりの大切さ」を具体的に見せて下さいました。

最後にコーディネーターとして地域に根ざしたレクリエーション組織の大切さを確認しようとした私の質問に、佐藤先生は「私たちは地域にですね、生きてすごく思うことがある。すごい人がいっぱいいる。そのすごい人達が自分の持ってるやる気みたいなものを上手く町づくりとか地域づくりに参加ができるように支援することが我々の役目かなという風に思ってます。志を持っている人たちをまとめながらにですね、はめ込む作業というのはもうやめましょう。この町をどんなふうにしたらいいかというビジョンをやっぱり挙げて、360日上から下から横からななめからですね、アプローチしていく人がたくさんいる町がこれから勝ちだと思います。そういう意味では上野先生とか伊東先生とか素晴らしい活動をしているなという風に思いますね。」と話されました。

参加者53名（ライフ・ウェルネス学科学生23名を含む）の中には本学を卒業され社会福祉士として仕事をされている方もあり、アンケートの「研究会の感想等」に「地域活動があるため、今回の研究会は大変ためになりました。卒業後も、このような機会で、知識や実践報告に出会うことは、大変意義のあることだと思っています。今後も、機会があれば参加したいと思います」と書いてくださいました。ありがとうございました。

（研究会報告担当者：井上　弘人）